



おじさんズ通信

2024年1月号 (No.38)

発行元：登別市新生町
桃柿通 緑風舎
発行者：おじさんズ3号



発行は毎月15日頃。バックナンバーは「おじさんズ」のホームページでどうぞ



2024年・辰年 緑風亭の雪像前から 本年もよろしく

皆さま、あけましておめでとうございます。早速ですが、上の雪像写真のご案内から。

今冬こそ、庭の緑風亭にカマクラをつくり、「ひとり夏祭り」（2021年6月号掲載）の冬バージョン「雪のおうちでビールをグイと、ひとり冬祭り！」を計画。少しずつ雪を集めていたところ、松の内明けの8日、クジラに食わせるほどの雪が降り積もり、方針を変更、さっぽろ雪まつりに参加したつもりで、雪像作りに挑戦しました。

構造が簡単な凱旋門にするか、それとも自由の女神像か、あれこれ題材を考えた末、「そうか、今年は辰年だ」と頭に浮かんだのは、約50年前に効果音制作でかかわった劇「竜の子太郎」（松谷みよこ原作）でした。

ネット上にあったトボケ顔の竜と太郎の図柄を拝借し、何とか仕上げたのが上の雪像です。どうですかね。空駆ける竜と、その上に乗る太郎を模（かたど）ったつもりですが、太郎については「どう見ても似てません」の辛口批評が聞こえそうです。

背景には、お向かいの2軒の家が写っていたのですが、個人情報重視の時代なので青空に加工。雪像だけでは寂しいので私の代役とらねこ大将や、正月限定の“第三ではない缶ビール”もセットしました。

思い出します、必死の音作り

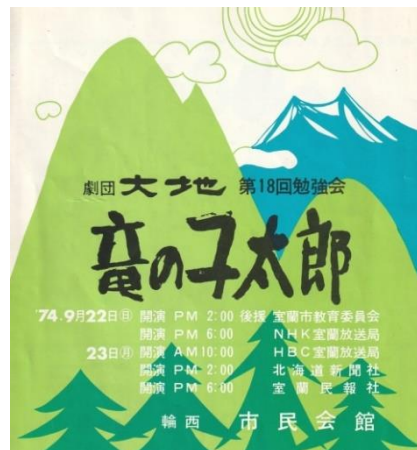
「竜の子太郎」は1974年9月、室蘭市民会館で地元の劇団「大地」が2日間、計4回にわたり上演しました。入場料は大人400円、子ども250円の時代。その効果音作りで、忘れられない綱渡りの冷や汗たっぴりの思い出があります。

ラストシーンで湖の水を日本海に流そうと、太郎を乗せた竜が岩山に体当たりし、見事、水を平野へと流します。岩の割れ目から流れ出す「ドドッ」か「ドッバン〜」か「ザザザップーン」か、とにかく迫力のある大洪水の音……作れませんでした、公演初日の数時間前まで。



必死に、本当に崖っぷちに立って考え抜いた末に、「あそこなら、いけるかも」と閃いた音の採取場所は、掃除用のモップを洗う会館内2階のトイレにある大きな洗い台でした。

バケツに水を満々に入れ、「流して！」と相方に指示を出すと同時にテープデッキのリールを回し、近づけたマイクで何回か繰り返し録音。すぐに再生してみると、バッチリではありませんか。喜びのあまり、本番では必要以上にスピーカーのボリュームを上げていました。





史書や日記は タイムマシンだ

と、あらためて思い知らされたのは、以前にも紹介した仙台の坂本龍馬こと玉虫左太夫（1823-1869）の「航米日録」（写真）現代語訳を読み始めて



間もなくでした。

幕府・遣米使節団正使の給人役として米国海軍のポーハタン号で海

を渡った左太夫は、安政7年1月18日から（3月に万延に改元）9月28日まで、1日も休むことなく船上での出来事や訪問した都市の気候風土、人々の生活や習慣など多岐にわたって書き記しました。

その文章たるや、まるでタイムマシンに乗ってそこに駆け付け、左太夫の驚きや感激、思いにふける様子などを横から見ているような気分になります。

砲窓壊れ、寝室は川に

その一例です。横浜を出港して5日目の安政7（1860）年1月27日深夜、暴風雨に見舞われ、左太夫の寝室は水浸しになります。というのも彼の部屋は、最も危険な場所にあったからです。

「自分の寝室は段上に有るけれども、大砲の砲窓の傍であるので、怒濤が押し寄せ、あっという間に砲窓が壊れてしまい、そこから波が進入して、辺り一面は川のようになった」

「自分一人のみ災厄を受け、満身ずぶ濡れになり、耳、目、鼻、口全て潮水に浸かり、殆ど気絶状態でその場から逃げ去ることが出来なかった」

結局、彼は中層にある奉行の部屋へ逃げ込み、事なきを得ますが、その狼狽、苦闘ぶりが目に浮かびます。

興味のある方は「航米日録 現代語訳」でネット検索するか、

<https://www7b.biglobe.ne.jp/~ryori-nocty/koubeinichiroku.htm>

からPDFのダウンロードをお願いします。

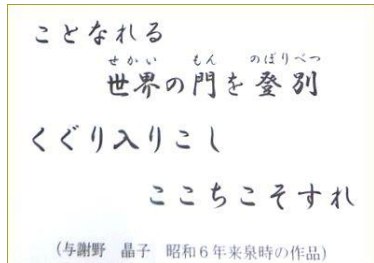
マ子に残る 書画、色紙もT・M

昨年12月上旬、某会合の勉強会で登別市内をめぐり、最後に足を運んだのが、温泉街にある登別国際観光コンベンション協会の事務所でした。お目当ては、大正14年頃から昭和20年頃にかけて登別温泉を訪れた歌人、文人、書・画家、政財界の著名人が残した揮毫や色紙、書画など、同協会所蔵の「石川侑次

コレクション」の見学でした。

石川氏は第一滝本館の支配人を務め、温泉の歴史を語り伝えた人物で、来泉した著名人に会っては揮毫などを頼みました。残された書画類は約500点ほどとか。

文化人では有島武郎、高浜虚子、森田たま、斉藤茂吉、土井晩翠、伊藤整、武者小路実篤、志賀直哉などの顔が並びます。昭和6年に訪れた与謝野晶子も、絵入りの色紙に短歌を詠みました。あいにく、撮影した写真は鑑賞に耐えられないので、添付されたプレートでご勘弁願います。



これらの文化遺産、多くの人々の目に触れる機会を作り出したいもの、と常日ごろ考えております。良いアイデアお持ちの方、お知恵拝借です。

このスプーン、お宝？

いつも使っているスプーンの柄を何気なく見ていた家人が、「宇宙人のようなマークがある」とポツリ。刻印された「Martian=火星人」の文字を頼りに調べてみると、SATOSHOJIなる由緒ある会社の、意味も多々あるマークでした。

マーシャンの名前は昭和33年、来るべき宇宙時代に世界のマーケットに飛び出すための象徴として付けられたのだとか。

そのマーク入りスプーンやフォークに出会いたければホテルオークラやシュラトンホテルへとは同社ホームページのご案内。セレブの皆さんはどうにご承知、知らぬは我々庶民、平民なり一ですが、それが何故我が家にあるかは、ヒ・ミ・ツです。



薫風 烈風

▶正月早々、ストーブがストライキを起こし、地元の修理会社にSOS。やって来た30歳くらいの男性2人と話しているうちに、母校の後輩と判明。喜び勇み、「1966 第38回選抜高校野球大会」の出場記念ペナントを持ってきて見せたら「うちの学校、甲子園に行ったんですか。知りませんでした」と口をそろえるから、当方ガックシ。昭和は遠くなりけり。

▶ウクライナ、ガザ地区、そして今度は能登半島大地震。1日も早い終結、復興・再生を祈るのみです。今年もよろしくお付き合いの程を。お元気で〜。